

編集後記

霞ヶ浦の汚染が進むにつれて、霞ヶ浦に関する原稿の数がどんどんと多くなった。そこで今回は霞ヶ浦の特集をする事にした。何しろあの水の汚なさには愕然とするばかりである。最近開店したヨーカ堂の下の排水は黄緑色に濁っているし、観光ホテルの前のドッグ附近の水はペンキを流したような緑色。汽船の発着所から下を見下すと緑の水の表面に、黒い硫化水素の泡がぶくぶくと浮いてくる。土浦の市民は、この水を飲まされているのかと思うと全くやりきれなくなる。十年、二十年後に、果して無事に生きていられるのかと真剣に考え込んでしまふ。情けない時代になったものだ。

※

久松こうさんの話を聞いていると、自分達の失なつたものの大きさに改めて驚ろく。霞ヶ浦は人々の心から完全に離れ、「水資源」としての存在価値しか無くなつてしまった。泳ぐことも、釣を楽しむことも、眺めることもなくなつてしまつた霞ヶ浦。人間はいつか恐ろしい復讐を受ける時が来るだろう。

※

水俣の上映に当っては、中沢玲子さんが正に東奔西走

フィルムの借り出しから切符のデザイン、お金の心配、ポスターはりなど、二ヶ月余りの間実に苦勞しました。その甲斐あつて、当日は予想を上回る盛会、赤字にもならずよかったです。ほんとうに御苦勞様でした。

※

八月十二日の北筑波ハイキングの日は、これまたバイタリテイに充ち溢れる奥井登美子さんが大活躍。大型バスが満員で乗り切れない程。「林道建設反対」「緑を守ろう」の旗をかかげて十キロの山道をテクテク歩く。三才のこどもまでが弱音をはかず、汗びっしりになって最後まで歩き切つたのには全く驚ろいた。こんな素晴らしい山道を、コンクリートで固めさせてなるものかと、改めて思つたものである。(編集者記)

「桜川」第五号

発行日 昭和四十八年十月二十日

発行所 土浦の自然を守る会

編集人 佐賀純 一

連絡先 土浦の自然を守る会
飯事務所(土浦市桜町)

電話 0357

印刷所 大 土浦市荒川沖町